

研究の概要

1. 研究主題

「自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成」
～国語科を中心に～

☆研究を通してめざす児童の姿

課題解決へ向け、主体的に、協働して解決しようとする子

2. 主題設定の理由

(1) 昨年度の研究から

昨年度までの研究の成果と課題は以下の通りである。

○成果

- ・教師が事前に言語活動を行い学習のゴールを子供と共有したことで、学習活動への見通しを持つとともに、相手意識や目的意識を持ち、粘り強く学習活動に取り組むことができた。
- ・単元の初めに一人学習の時間を設けることで、全文の概観を捉えて学習を始めることができた。一人学習の視点を工夫することで、子供から学習で解決していきたい問いを引き出すことができた。
- ・「学ポジカード」を使って学習を行うことで、自分の学びの状況や友達の学びの状況を確認しながら交流の必要性を判断して学習に取り組むことができた。
- ・積極的な GIGA タブレットの活用を進めた。考えを共有したり、書く活動に取り組んだりする際に効果的に活用することができた。また、「学ポジカード」を GIGA タブレットで使ったり、学習の到達状況を GIGA タブレットで可視化したりすることで、子供の自己決定に繋げることもできた。

●課題

- ・魅力的な言語活動の設定を意識して教材研究を進めたが、想定している言語活動や B 規準が適切であるのかということを経験間で話題にするための環境作りが足りなかった。
- ・子供が自己決定しながら学んでいく過程で効果的な支援の在り方についての共通理解と共通実践が不十分であった。
- ・友達と交流しながら協働的に解決していく授業づくりを進めたが、自分の考えを広げ深めていくために必要な対話のスキルも同時に高めていく必要があった。
- ・GIGA タブレットの使用については、何のために使用するのか子供に目的意識を持たせられるとよかった。

(2) 主題設定について

昨年度の児童アンケートでは、「学校の授業で自分は成長している」と感じている児童の割合が高いことが分かった。自己決定しながら学習を進めることで成果が見られた一方、協働的に解決を図る場面では友達との交流を通して自分の考えを広げ深める点に課題が残った。また、標準学力調査の質問紙調査における「自分にはよいところがあると思う」という設問に対し、否定的な回答の割合がここ数年全国平均よりも高い状態が続いており、児童の自己肯定感が低いことも本校の課題である。学校研究を通して児童の自己肯定感を高めていくことが必要である。

全ての学習活動の基盤となる「学ぶ楽しさのある学校・一人一人の居場所がある学校」をベースに、子ども達が課題解決に向け自己決定しながら主体的に学習に取り組むことで自己肯定感を高めていく。そして、友達との対話を通し、ともに高め合いながら解決を図っていくことで集団としても成長していることを実感できるようにし、自己肯定感の向上につなげていく。本研究を通して、自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成を目指して、本主題を設定した。

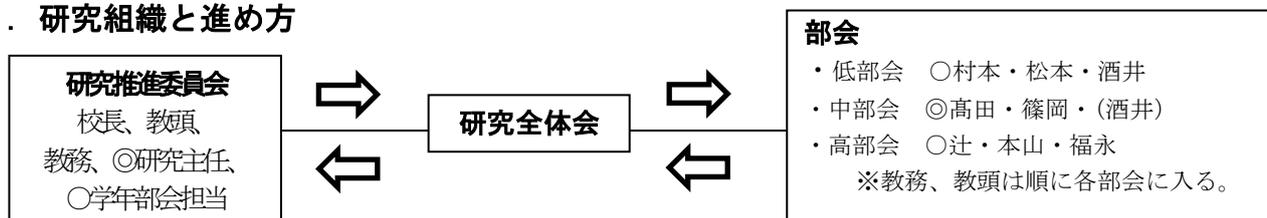
3. 研究仮説

自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成を目指し、3つの手立てを基に、授業改善を行っていく。

- ①教材研究の充実
- ②子供の成長につなげる見取り
- ③児童が自ら学びへ向かうための取組

- ①目標を達成した児童の具体的な姿を想定し、教員間で連携して教材研究の充実を図ることで、主体的に協働して学ぶ児童の姿を実現することができるのではないかな。
- ②一人一人の状況を見取り、適切な支援をしたり、意図的に子供同士をつなげたりすることで子供が自身や集団の成長を実感できるようになり、自己肯定感の向上に繋げることができるのではないかな。
- ③学ポジカード等のツールを使いながら学習経験を積み上げていくことで、児童が経験を生かしながら自ら学び、考えることができるようになるのではないかな。

4. 研究組織と進め方



- ①研究推進委員会の推進のもとに、研究全体会の研修内容を充実させ、研究を進める。
研究全体会は、研究推進委員が進行・記録をする。
- ②各部会では、指導案の作成・検討、教材研究、日常の授業での取り組みについての情報交換等を行う。
- ③研究全体会では、教材研究・指導案検討・模擬授業・授業整理会・講話等を行い、主題に迫る。
- ④講師を招聘し、研修を深める。
- ⑤校外研修で学んだことについて報告会を行い、全職員で共有し、実践に生かす。
- ⑥PDCAサイクルを基本とし、研究授業等で見えてきた課題を日々の実践に生かしていく。

5. 研究の内容

(1) 自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成に向けて

①個別最適な学び

- ・学習指導要領解説を基に、指導事項と付けたい力を明確にする。児童の実態を基に単元の中でどの時間を委ねるのか想定して単元を計画する。
- ・学習課題作成シートを活用し、児童にとって課題解決への目的意識や必要感を持たせられる学習課題を設定する。学年に応じて学習計画を子供と立て、課題解決へ至る学習活動への見通しを持たせる。
- ・学年に応じて物語文、説明文の学習では単元の初めに一人学習を行い、全文の概観を捉えられるようにする。
- ・児童がどんなところでつまづきそうなのかをあらかじめ想定し、必要な手立てや支援を用意することで自分の考えを持てるようにする。
- ・学ポジカードを使用して、自分の学びの状況を客観的に把握できるようにし、交流の必要性について自己決定し、交流の目的を認識できるようにする。
- ・学習計画や言語活動の成果物をデータで保存してふり返ることができるようにすることで、新しい学習ではどのような活動ができるのか見通しを持てるようにする。

②協働的な学び

- ・課題に対し自分の考えを持てるように手立てや支援を行い、多様な考えに触れられるように交流場面を想定し設定する。
- ・交流を行う際は何のための交流なのか目的を共通理解させ、ねらいを達成させるための交流の視点を明確にして行う。
- ・児童が自己決定して交流を行う際は、児童の考えや状況を適切に見取り、必要に応じて教師が交流を促したり、交流相手をコーディネートしたりしてつなげていく。
- ・児童一人一人のよい点や可能性を生かせるように見取り、ねらいの達成に向けて子供をつなげていく。
- ・学習内容に応じたふり返りの視点に基づき学習をふり返らせることで、自己の変容を実感したり、次の学習への意欲を引き出したりできるようにする。

(2) 学びを支える基盤づくり

①基礎・基本を育む土台

- ・漢字や計算の基礎基本の定着と確実な積み上げを行うことができるように、朝学習「ばっちりタイム」の時間を活用して習熟を図る。学力向上ロードマップに基づき、学力向上チームを中心にOJTを行い全校で基礎・基本の定着と確実な積み上げに向けて取り組んでいく。
- ・「ばっちりタイム」の時間を活用して継続的に対話トレーニングを実施して、学年に応じた対話のスキルを身につけられるようにする。
- ・良い文章に触れることができるよう朝読書の時間を有効に活用する。学校司書と協力して、各学年に「おすすめの本」を設定したり、月に1回読み聞かせをしたりして、幅広い本に触れる環境を整える。
- ・子供が学習用語を正確に理解できるような授業を行う。学習用語を掲示したり、学習用語を用いたふり返りを書かせたりして、学習用語を大切に授業実践を行っていく。
- ・学年に応じて家庭学習として自主学習に取り組んでいく。子供のノートは校内で掲示や展示をしたり、全校集会を利用して広げ、認める場を設けたりすることで、主体的な学びの向上に繋げていく。
- ・音読の力を高めていくことができるように、全校集会や委員会活動等を利用して発表の場を設ける。

②授業を支える土台

- ・生徒指導の4つの視点を生かした学級・授業づくりに努める。互いを認め合い、安心して学習できるような学習環境を整え、児童一人一人が自己指導能力を身に付けることができるようにしていく。
- ・授業を支える学習規律を徹底する。「チャイムでスタート」「学習道具の準備」を基本とし、全学年共通で取り組み、定期的に確認していく。
- ・学習課題作成シートを活用し、教師間で連携して教材研究の充実を図っていく。魅力的な言語活動を設定し、学習課題についても吟味していく。

6. 研究計画

月	日	研究会等	内容
4	8	研究全体会①	研究概要・研究計画について
5	15	研究全体会②	研究授業①について
6	4	研究全体会③ 要請訪問	研究授業①について 研究授業① (中学年部会)
7	22	研究全体会④	1学期の振り返り 児童・職員アンケート①
8		研究全体会⑤	2学期の研究について
9		研究全体会⑥	研究授業②について
9	18	研究全体会⑦ 計画訪問	研究授業②について 研究授業② (高学年部会)
10	1	研究全体会⑧	
10	2	研究全体会⑨ 研究部会	研究のまとめについて 2学期の振り返り 児童・職員アンケート②
1		研究全体会⑩	研究のまとめについて
2		研究全体会⑪	来年度の研究について

研究授業について

- ・要請訪問・計画訪問で各部会1本ずつ行う。

研究の重点を意識した日々の実践

- ・「主体的な学び」「協働的な学び」が授業で展開できるように教員間で連携して教材研究を充実させる。

研究のまとめについて

- ・日々の実践の中で行ってきた2の重点についての成果と課題をまとめていく。国語科、他教科の2領域での実践が見られるまとめとする。

研究主題

自ら学び、考え、ともに高め合う子の育成

～国語科を中心に～

研究を通してめざす児童の姿

課題解決へ向け、主体的に、協働して
解決しようとする子

言語活動を通して、国語で

正確に理解し表す力

集団としての主体性

手立て②

子供の成長に
つなげる見取り

- ・子どもをつなぐコーディネート
- ・交流場面での教師の積極的な関わり
- ・児童の状況の把握

手立て①

教材研究の充実

- ・課題解決に向けた見通しの工夫
- ・課題設定の工夫
- ・単元構想の工夫
- ・B 規準を明確にして、単元計画に
落とし込む（評価場面も明確に）

協働的な学び

主体的に

生徒指導の4つの
視点を生かした学
級、授業づくり

手立て③

児童が自ら学びへ
向かうための取組

- ・ふり返しによる自覚化
- ・学び方の自己選択
（学ポジカードの活用）
（ICT を活用して視覚化）
- ・既習の保存と活用
- ・単元を通した課題意識

個別最適な学び

・交流の目的と視点の明確化

- ・交流場面の設定→必要感のある場面で

意図的なグルーピングも

- ・一人学習時間の確保

基礎・基本を育む土台

- ・漢字、計算の習熟と
対話スキルの向上
- ・音読発表
- ・学習用語の定着
- ・読書活動の充実
- ・自主学習の推進

学習場面に応じた
効果的な GIGA
タブレットの活用